



地震考

贈
600
175



門 普
補 600
卷 175

濤山先生筆記

地 震 考



頃京沙地大石不日不心東修葺主
人袖小記年而請余題言見其記今言
評說者舉此矣因寫仁和年間之禮
以代題云致塞其責云尔

文政十三年庚寅秋七月

卓堂字成



地震考



文政十三年寅年七月二日申の時をりに大は地震ひ出
るおどろくしくゆり動くは活中の寺藏築地など
大はいつく流す一一家居もあり去るの流す一は数多
ありく築地も塙も大は倒す怪家せし一は救
多あり昔はあつゆ受けと近く敷の土地よくを
しきハたつりけをバく一驚さおそくはく一
を走し出く大流はまもの為に坂の高うと仰るは

いとわづ二三日のほどに家の内は痛くなく或は大寺の塔
内よりはつ或は洛東の川原へうつろあたる壁をよほど
ひく板とわづけはかく二日四日してもたてを残り
の小きき震ひ時々ありてけし免はる夜は二十度も
有し次才又志づりて七八度をくり二に度もある事
もありゆきまよけし既ニサ日あちちを經ゆきとなほ
おこきこころの震ひもやまを倍くくのみまじひ恐る
ことなり世の流^{コトハサ}は地震はまよわまじひく大風ハ津江

つよく雷ハ末など甚しといふ事をりけし免の程の
大震ハたまこころはくわきとちのか婦女子小兒は
こころいづとあんどわづらひくいまやくと尋
ねるふくのきをゆきハ舊記を志して大震の後小
震ありて止^{ヤメ}ざるを筆^{ツギ}く人のころをよま
せんとたよま^{ヤメ}てゆき
上古より地震のありし事^{サイイ}国史又えりて^{ツミシカ}類
聚国史一百七十一の卷災異の部は家て^{ツミシカ}詳なり

三代實錄 仁和三年秋七月二日癸酉夜地震 中畧 六日
丁丑虹降東宮其尾竟天虹入內藏寮 中畧 是夜地震
中畧 世日享丑申時地大震動經歷投射震猶不止天皇出
仁壽殿御紫宸殿南庭命大藏省立七丈帳二為御在所
諸司舍屋及東西京廬舍徃々顛覆壓斃者衆或有失
神頓死者支時亦震三度五畿內七道諸国同日大震官
舍多損海潮漲陸溺死者不可勝計 中畧 八月四日乙巳地
震五度是日達智門上有氣如煙非煙如虹非虹飛上屬

天或人見之皆曰是羽儀也 十一日癸丑嘗集州
堂院白虎樓豐樂院拙霞樓上陰陽寮占曰當復失
火之宜 十三日甲寅地震有警集豐樂院南門鷄尾上
十四日乙卯子時地震十五日丙辰未時有警集豐樂殿
東鷄尾上 皇
皇帝紀抄云文治元年七月九日未刻大地震洛中將
外堂社塔廟人家天略顛倒樹木折落山川地盡變
者多其後連日不休四十餘箇日人皆為信心神靈

長明の方丈記云元暦二年の以丈をのふる年
了き廿二さまよの者ちび山とづきく川をうづ
かふきく障をひらけり土さけく水海よりいそ
まねるる言よまろむ入流こく舟ハ波またよひそ
ゆく約ハ是の立とをまどけまり況や却のちりハ
本々承く半舎塔廟一として不全中畧かくおひこ
くくふくこやい志ごくはく止くくを名終志ごく
ハ終志を尋事よおとくかとの地震二三十度ふね

日ハ初十日廿日さうバやうく寄遠よちり
或ハ四又度二と夜中ハ一日ま替二三日一夜ち
大く其名残三月をうりやゆらん
天文考要よ寛文壬寅五月畿内地震北江最
甚餘動屢災至於歲終
本朝天文志よ宝暦元年辛未二月廿九日大地震
諸寺舎破壊餘動至六七日止
かく救くあは申にもはるる大震く後小動を止

されどもさういふごとく大震はなから我友廣嶋氏
おとく法蘭西より大地震は四つほどあつたといふは、
滞りし始末をよくおぼしり小節ハ之よりおぼし
められしときハ一度もあつたといふは是れ現在の人にて
説くときさういふ事あり

○地震之説

徑世術義ニ孔叢曰陽伏干陰下見迫干陰而不能升以
至於地動と如此陽氣地中ニ伏して出んとする時陰氣

抑オサへられしとある事ハ然ハ地中ニ激攻ゲキコウして動揺ドウユウと云
なり國語の周語ハ伯陽父の言ふも如此古代よりこれ
世説といふ

天經或向之云地ハ本ト氣の渣滓聚カスアツまつて乾質ケイシツと成り
元氣ゲンキ旋轉センテンの中ニ束ツカね故ニ元氣ゲンキと云へば厚んで隆オチ起
四圍シキニ竅アナをさくお通じ或ハ蜂の窠のこころ或ハ菌クサヒラフスチ類乃
じく水火の氣其申ハ伏ケダシと蓋フシ氣噴フシ盈エトして舒ユルんと欲
しつづることを以て身の筋シラ筋シラして振ミダ揺ウコウがごとく示

雷霆と程と同ふを北極下の地ハ大寒赤道之下ハ偏
熱^{テツ}よ^テく^もに地震お^ハ砂土の地ハ氣疏^{アツ}く^テ震ま
ら^ズ震お^ハ泥土^{デイド}の地ハ元^トの氣^ト蔵^ルむ^{コト}に^テ故^ニ震
お^ハ温暖^{オンダン}之^ノ地^ニ多^ク石^ノ地^ニ下^ニ空^ク完^ルて^テ熱^ヲ吸^ク入^ルて^テ冷
季^ノの^ト多^クは^テ振^レ歛^セれ^ル極^ル則^チハ舒^ク放^シて^テ地^ヲを^激搏^ス
も^トた^トハ^ハ大^ノ筒^ノ石^ノ火^ノ矢^ノお^ハど^トと^高樓^ノ巨^ノ塔^ノの^下に^テ後^をさ^ハ
其^ノ震^衝を^被つ^{コト}を^ささ^ぐく^{コト}に^テ地^ヲを^ども^も大^ノ地^道
く^テ地^震を^ささ^ぐる^{コト}に^テ震^ハ各^ノ處^ノ各^ノ氣^ノ各^ノ動^カら^ルコト

唯一處の地^ノの^ニ於^テは^ハ其^ノ輕^ク重^クは^ハ由^テて^テを^ささ^ぐの^ノ變^ハあ^ル地^ノに^ハ
新^ノ山^ノを^海に^新島^ノあ^ルの^ノ軟^クひ^かれ^ルに^テ震^後地^下の^ノ燥^キ氣^ノ
猛^ク迫^ルく^{コト}熱^ク火^ノを^變して^テ出^ルる^ハ則^チ震^停る^{コト}に^ハなり^ト

○地震之徴

震せんときる^ル時^ニ夜^間は^ハ地^ノは^ハ孔^ト敷^ク出^ルて^テ細^クな^ク壤^を
噴^キ出^スて^テ田^圃坊^がく^くく^{コト}に^テ是^レが^ハ地^震か^らぬ^{コト}に^テ持^上る^{コト}の^軟
お^ハらん^を
又^ハ老^農は^ハ耕^をする^時に^ハ煙^をを^生ず^ル大^ノき^をを^受て^テ將^ニ

は震せんとき向を知らずと

又井水より湯り沸く亦震の徴しるしなり 己上
天文考要

又世は云々云々の如くなるは地震の徴なりと云々
よ、あつた事の上昇する事、煙の如く、その如く
見えたり

地震の和名をなると云、和漢三才図説は、なまへとあり
なるの和名、然るべしと云々

孝宣帝の詔は、なまへ魚、なまへ魚、ゆめの釣、なまへ

なまへと云々、なまへ魚の尾、尾を動かすこと、
動揺するを形容して、名目とせらるるなりと云々、
云の如く、なまへなるは、名目とあり、なまへと云々、
をもて、思へ、なまへ魚の信、なまへ魚の信、
なる、なまへ魚の信、なまへ魚の信、
建文九年の暦の表紙は、地震の由と云々、
日本六十六州の名を記し、そのもの骨、
なまへ魚、既、なまへ魚、なまへ魚、

の説も仍舊の書ふに授あらん。佛説よハ魏の亦為とも
 いふも古代の後ハ大やうかくのどときもの外どく
 ○佐渡の國ハ今もあまなるふと云なるハせり琉球と
 いふ通ぎは古言の巴郡ハ残る事いふべし
 ○三代夏涼仁如三年地震と條ハ京師の人民出盧舍
 居干衢路さくさくの系ハのあつと後ハかくのごとく
 以と残る事なり

○地震ハ付く其應徴の事おとハ漢書晋書の天文志

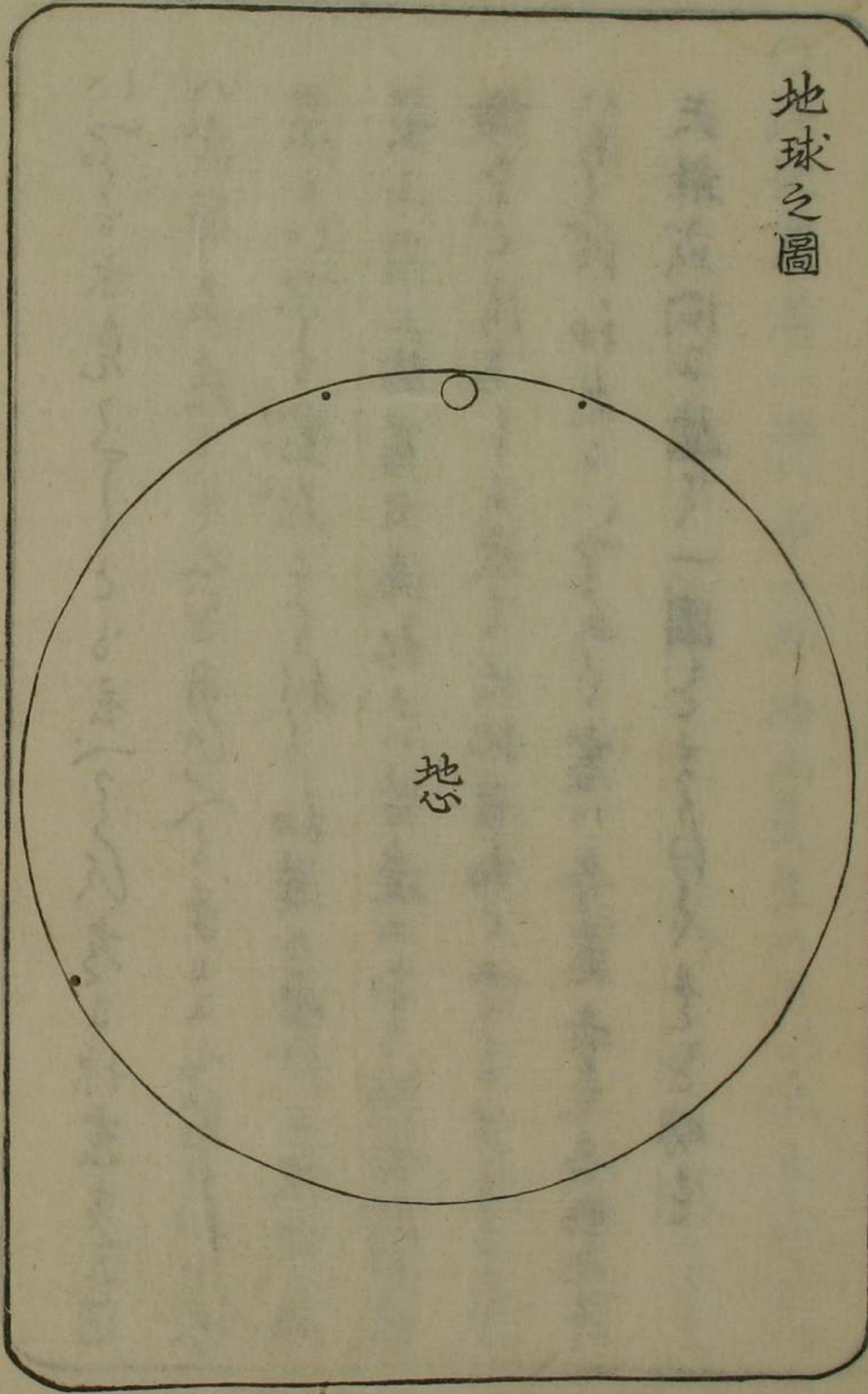
おとあま其應オカを記しあれは唐書の天文志よりハ
 變を記し其應を記しは是春秋の意ハ本づくかり
 今太平の御代ハの應ハ是あま地震即サライ災異に
 して亦ハ應の有オカきく事ハくくをるをやまんと
 する者の勢ツトメとれあつるごとく

文政十三年
 寅七月廿一日
 思齋堂主人誌

○此地震考一冊あり師濤山先生の考ふ所にしてこの
頃童蒙婦女或ハ病者たどさばよくの虚説はもと
いふゆゑれはゆきまゝに今に不動も止むは後大震
やあつんとするも安らざるハ歴代のたゞと考て女
まゝいと教さるるをせんとははるゝに京師ハ上古
より大震も稀なり宝曆元年の大震よりこゝまゝそ
星霜八十年を経るハ如く人まゝなり災異ハ係
て教を換へ疵をかくる人救ふなり時の災難とハ

いづれも亦免るゝとも云へるは考は地震多し固
ハ倉庫家建もまゝを引くも平日よりゆれハ大
震といづれも^{アツシ}堅死さるなり和漢の歴代は此等地
裂山崩土陷寫出濤起ハ皆邊土なり阿含經智度
論などにはよく説て大地皆動くやうに受えらるる
ハあつて初起といふはよく震ハ各處各氣各動也予
天経或向は據る一圖をまゝけりてを明き

地球之圖



地球一周九萬里是と唐土の一里六町とて日本の一里
 三十六町と算まれば一周一萬五千里と計るは時
 地心より地の上まで凡二千五百里ありは圖黒點の間凡
 一千五百里あり今度の地震方二百里と云ふ所の僅り
 圖とる所の小圓の中はゆりゆり是を以て震動と云
 所の微少ありや地球の廣大なる事と云ひてもよく
 ○愚按とるに天地の中造化皆本末あり本と根事に
 して心ココロなり心とハ震動と云ふ所の至るハカシ猛烈なる所と

さし其心より四方へ散りて漸く柔緩なるを末と志
くれば東より揺れあり西より動きあるにあつた
其心より揺れ初く四方あり其浪ハ段々微動して畢る
おんて度震動する所京師を心して近國より
末ハ東武南紀北越西四國中國に揺れ又京師の中
ても西北の方心ありてや其時東山より此地震に遇
くまづ西山何れく氣立升りて忽市中土烟をうき
揺れあり初めく地震ありと知れり

○又地震の徴あり事現在る所當六月廿八日日輪西
山に没する其心血のごとく同七月四日月没する其心亦
同く和漢合運云寛文二年壬寅二月六日より廿日まで日
朔夕如血月亦同五月朔日大地震五條石橋落朽米谷崩
土民死者七月未止あり廣嶋氏の譚に享和三年十一月
諸國ありて佐渡の島小島といふ處に滞るせしに同十五日
の朝ありて同宿の船をせし船政とも日に和を見
むとくさきさきあり丘一歩より船政のいづくを日のてき

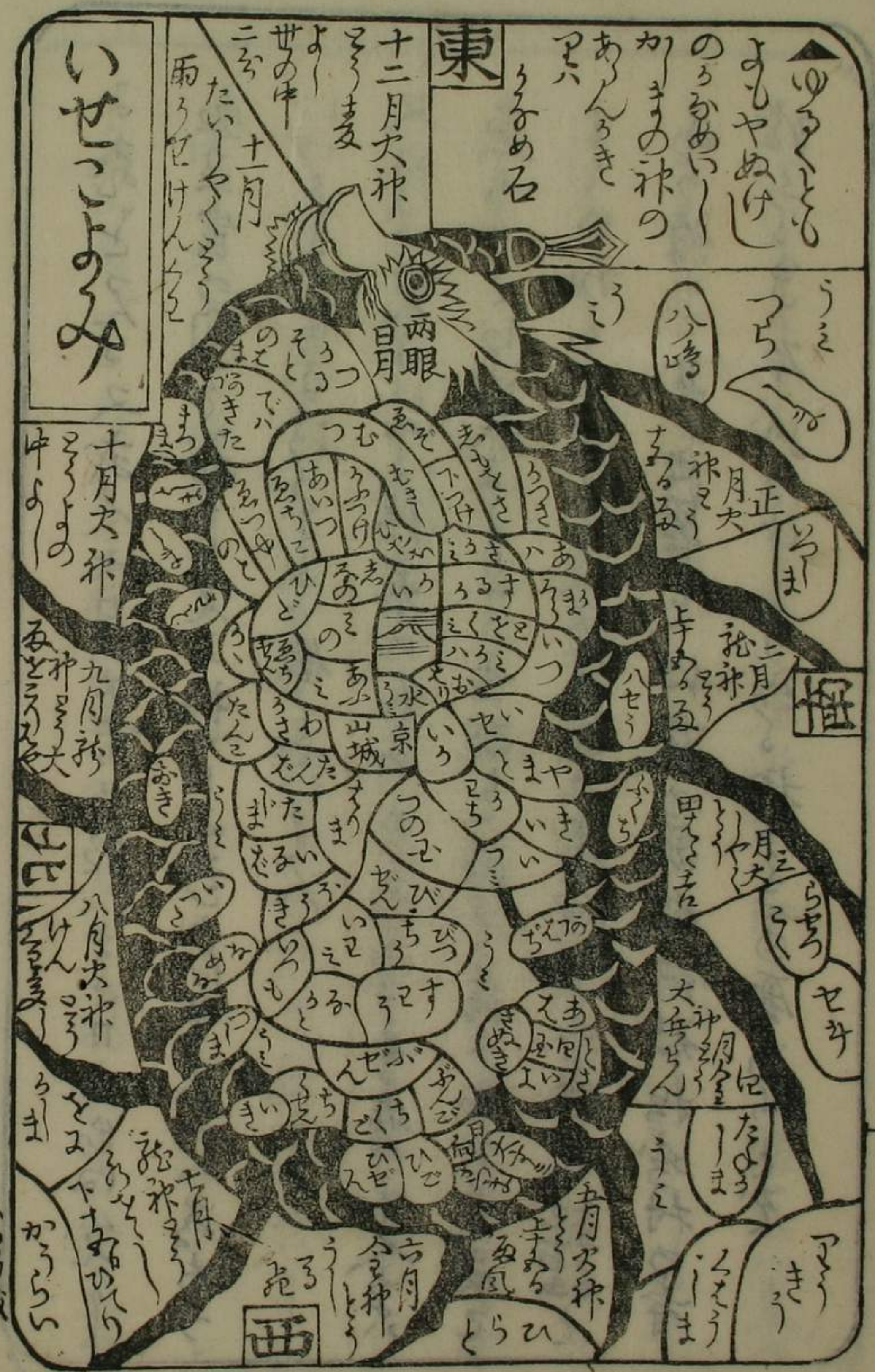
誠よあやうげらり 四角^{モウケク}儼くして雪山の嶽より山
 半後より上の峯あもろく雨ももろくを風もゆる
 とも見えは家々まゝくの時たま天音をえんばと大ふ
 あやむは時廣嶋氏考く曰是のたふにわむ
 地氣の上升もゆるん平初年のとき父も笑ける事
 有地氣の上升もゆるん地震の微^{シホヒ}ありと時節も^{ニウク}記録有
 づらんと急ぐ^{イナク}時節ありゆりまは其中をつげは地後山
 前^{イナク}海より甚危し又^{イナク}時節も時節の地よりゆるん

とくをうて病おなど先へ送るきをこくま交度しく
 立出ぬ道の程に里計もゆとおゆり山申す果し
 大地震せり地は浪のうつこく揺^{ユラ}く大木など枝を
 な地をおふくまろびおぐ^{ウレホ}嶽のうづゆる^{ニナギラ}去るぬ世時小
 木の揺は山崩れを^ガ嶽^{ウレホ}は潮漲^{ウレホ}る舎^{イハ}至^{ニナギラ}感^{ウレホ}海は入
 大なる岩海より涌あさりそれより毎日小訪りて翌
 年六月子嶽く止りて人々後日必金山といひりし
 時より地震は定免し^{ツブ}穴も^{ツブ}透せくも^{ツブ}換^{ツブ}せし^{ツブ}やゆ

訪ひしよさハおく詰いふ世地ハむしより地震ハよ
まきらぬきる地震も三日以内ハ其^{しんじ}徴をきりて皆宛
に入らば用をせし者一人も怪ふなるとちり女徴を
いふやうなるやと仰し將に地震せんともる前ハ宛の中
地氣上升して^{カタガ}焼なるもたがひは後より上ハ唯際と
して見れば是と地震の徴といふ所按るよ考ふ地
中は入るの地震をよきとるるハ宛中よありてよく上
升の氣をきると度地震せんともる所救子の警一度

よ飛とるる又或人六月廿七日の朝いづこ日も出ぬ先り
血五箇の間ころと見えぬ日ふむひてふつハ考ちり
いづきも事よほつとるハ徴とやいふん

○又けえといふ地震の和名なふる季鷹丈人たふ
魚ちちといふ説より古國を治く後よ出は是國こ
よこの初り出して次は遠久九年^{つちのえ}の曆元^{むま}三百五と
あり強ハらと畧と伊豆の國那珂郡松崎村の寺
跡ふるき^三年^五の仲より出る摺まきの曆ありとぞ



摺記享保九年の所法より昔四方市といふ盲人の名
 答の調子聞え人の吉凶悔吝を占ふよめりて遠く
 都一應山へいさるんやとて毎々来りて法次は伺候は
 晩年よなひしくやせしははれをことを覚えて甚くや
 一終りくは交もる毎々其人の吉凶を耳よりきき
 いかやとやけりて去りて小夜くのその名を
 かくし此四方市胡風り起る僕を呼ひぬ
 けき調子ちり此調子にハ大方京中ハ威却をべり

十一

ぞ急ぎ食うても徳免て我を先塔我の方へ逃し申け
と云日頃の子きいふもあはハ子迷ふをけりて塔我より
嵐山の麓大井源原より着く暫く休息して云申いふに
子なわらびあはいふう大方大失事如べくと人衆を新
をもおきて北へ逃せしといふに同い調子あるハ世も無恥
と云んゆ愛宕山ハ知事居坊あり是より逃しゆ事といふに
とと又登りて其坊より多く坊を出る何れか早く
ハ登山へけりてせし志ありの事有と云ふはあはれに

と何れも我安んじたりとも言き取らるると云甘言
は獲たをあり此より逃れよと云ふハ六ヶ所入る大よと云
あはれぬおぼえははかり初めあつとて唯いつまで
も此より逃れよと云せし頃て地震ゆき出り夥しき事
いふも有り
世間云實
年大塔着何と云ふにむ彼獲た屋ハ架作タナヅリにて
於て深苔崩れを度く破換し四方市もなると云ふ六十余
里も有りき計一生の終りをし人の吉凶と一毎にほど
知るもの已に終る所を志すにのみに報じ死場にてあはれ

けりしゆこそ不審なる是昔の極る新に凶凶の極る亦い昔にれい如く
毎夜を禱うおほきなりと仰るる愚按るは四方市の古考著きしゆ
賞もるに余りあり既天地の變異を知らずを宿山より仰りし
うへにこれ此山より仰りしと云ふは其變りあんなれは是をい
陰極りしと陽の變り陽極りしと陰を生じ樂極りて哀生じ
といふは同じく其の變り一極の大變なり震氣充滿して其
むは遠く遊るは亦なりといふ所は其の變りも亦然るは極ると
いふ變りも亦なり其音調のまじりしも亦極りしゆは是なり

素問五運行大論曰風勝則地動 怪異辨論曰
此説は陰不時に地震ハ風氣の不為也又曰地震は餘の
後世候に有佛説なるは風を吹く縁と一たるもの也
奥ハ陰中の陽物もれハ風と云ふと一なるは人河をい
も正理ハ遠き説あり白石の東雅ハ云地震をなみふ
るといふはなみといふ事なりとハ動くちりり動の義なり
今後をなみいふはなみといふ事なり又動くちりりゆるぬと
いひゆるはなみといふ事なりとハ古の語はゆるといふ

かをいふも即ち是なり愚按るに又古之云と北越四去
又いふ二才國舎又なと出づるハ何よりわづらふもふり
をいふと云ふ之をいふをいふに收る形も收る根より地
をいふ地震をいふ子細あり揚子方言云東齊謂根曰王
非專指桑根白皮又日本紀神代卷子根之國と出づ
るハ地をいふをいふ又或人云なるゆるとハたゞいふ
たゞのゆるといふをいふ

活東

東隴葦主人誌

題地震考後

災異之可思莫大於地震以雖其地折山陷海
頃河翻不絕翰飛戾天也然若夫古今傳
記所載及近時邦國更有棟壞牆倒傷
害人畜者人每邈然視之徒為一場奇譚
及其實歷親履心駭魂銷而後始回想當
時以知為可思已茲庚寅七月二日京地大
震餘震于今未歇人心洵一言震若有甚

烏將憑何得免民之訛言。孔之將言某日時震甚。又言某事為祟。又言某日暴風雨。與震並臻。重以丙王棍賊之警。人不知所底心。或廢業舍務。且携家逃震遠地。濟山先生老益。惴惴其如此。為錄此言。以喻民心。釋其惑。故云。祥不飭考。徵而不務。多東隴主人受而敷。徐禔而行之。清余議其由。適有人為余說其先人之言。

云如某什器。今人不悉其用。注以爲不便。不知方其大震。掩此底身。雖棟椽牆倒。保其無恙。又如今灯架。設承蠟炬者。亦皆震之備。蓋寶曆大震之餘。所慮而設。至天明。鬱攸之後。人不知震之可畏。今日之搆造。唯災之備。可見非實歷親履。思慮不及。人心向背之速。如此。目並記此。欲人之觸類而長之。每有所懲。志有所備。預。

文政十三年庚寅秋八月上澣

三絨主人識



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

齋政館都講

小嶋氏藏板



不與賣人

